

はじめに—実践研究（1）歩いても歩いても、森—

日本語教育実践研究（1）は、「学習者の多様化」、「支援者や学習の場の多様化」を踏まえ、多様さに直面したとき「日本語教育」はどのように展開していけるか、を課題として実践研究を進めています。その場が、『にほんご わせだの森』という「教室、のようなもの」であり、受講生は「地域」と「ことば」と「教育」をめぐって自ら考え自らの実践を組み立てていきます。2010年度春学期は受講生2名が全11回の実践を、秋学期は受講生2名と聴講生1名が全12回の実践を実施しました。

それぞれ話し合いを重ねながら

- ・教室の**デザイン**…目標設定、物理的な環境作り、学習者の募集
- ・教室の**運営**…目標設定、学習活動の決定、教材などの**開発**、活動の**実施**、

内省、評価

- ・『わせだの森』から見られた諸問題の把握と**分析**
- ・諸問題と「日本語教育」との関連についての**考察**

を進めていきました。また、『わせだの森』という学習コミュニティを運営し維持していくために、受講生たちは、実践研究の授業時はもちろんのこと、授業外にも多くの時間を割いて議論をしたり教材を準備したり、また、地域に出かけて行って「ちらし」を配布したりしました。自ら考え自ら実践を組み立てていく理念を具現化するプロセスでは、学習者も受講生もボランティア参加者も、共に様々な学びに出会えたようです。特に、実践者である受講生はそれぞれが「多様性」と向き合い、自分自身の「教育観」と向き合い、実践を形にしていきました。今回、その成果をまとめてご報告いたします。

2010年度も、これまでと同様、土曜の午後と水曜の夜の時間帯を活動の時間に充てたところ、水曜だけの参加者、土曜だけの参加者、そして、両方の曜日に参加する人も見られました。実践者側もこの日程を実践のデザインに組み込んでコースを組み立てていきました。この作業をひとつひとつ振り返ってみると、後ろにあるのは深い「森」。歩いても歩いても、森…という感覚は、果てしなく続く内省と教育観の再構築を表しています。この実践研究で得た学びは、今後、受講生たちそれぞれが自分自身の実践研究を進めていくうえで、また参加者それぞれが日本語を用いて自分自身を生きていくうえで、必ずやなんらかの糧となることでしょう。深い森の中に埋まった木の実のように、すぐに芽吹くものではないかもしれませんが、歩みを進めて行った先で出会うだれかやなにかに気づくきっかけが育っていると思います。

2011年3月

早稲田大学大学院日本語教育研究科
日本語教育実践研究（1）担当
池上 摩希子